

(第 1 回 午前)

2024(令和 6)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50 分)

《注 意》

- (1) 問題は ～ まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に書いてください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに書いてください。
- (4) 解答用紙のみ回収します。
- (5) 解答に際して、句読点、符号などが含まれる場合には一字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 中 学 校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

あなたには「推し」^①がいますか？「推し」がありますか？

います！ もしくは、あります！ という人、いたら（あつたら）いいなあと思っている人、そういえば「推し」って最近よく聞くけどいったいなに？ という人……いろいろでしょう。

「推し」とは、簡単にいえば、とても好きで熱心に応援^{おうえん}している対象（人や事物など）のことです。もともとは、女性アイドルグループのなかで自分をもっとも熱心に応援しているメンバーを指すファン用語でした。それがここ数年のうちに、さまざまな^①ジャンルのファンにも知られるようになり、いまや一般的に使用される言葉となっています。対象もアイドルだけでなくアーティストや役者やタレント、アニメやマンガやゲーム、ドラマや映画や舞台^{ぶたい}や小説、スポーツや物や事柄^{ことば}など、この世界のあらゆるものすべてが「推し」になります。

ここで「推し」についてはじめて知ったという人は、こう思うのではないでしょうか。なるほど、つまり「私は〇〇のファンです」というのを、いまどきふうに言うところ「私の推しは〇〇です」ってことか！

けれど、すでに「推し」についてよく知っていたり、自分に「推し」がいる（ある）という人は、^②「そういわれるとちよつと違うんだよね……」と思うかもしれません。では、ただのファンと「推し」は、いったいなにが違うのでしょうか。

職場の同僚^{どうりょう}に、フィギュアスケートの羽生結弦選手^{はにゆうゆづる}のファンがいます。スケート大会の前後には熱心にその話をしているので、かなりのファンであることは知っていました。^③でも私はなぜか、羽生選手を彼女の「推し」だと思ったことはなかったのです。

ある日、ふだんからおしゃれな彼女のネイルがとてもすてきだったので「そのネイル、すごくきれい！」と言ったら、「ありがとう！ これ、羽生くんの衣装^②をモチーフ^②にしてもらったの」というではありませんか。その瞬間、私は、彼女にとって羽生選手は「推し」なんだ！と気づいたのでした。

なぜ私は、彼女にとって羽生選手は「推し」であると^aニンシキするようになったのでしょうか？ そこに、ただのファンとは違う「推し」とはなにかを考えるヒントがあります。

どうでしょう？ これらの例から、^④ただのファンではなく、「推し」を推すファンのありようが少し見えてきましたか？ ただのファンと「推し」では、好きの^bテイドが^c異なるのはもちろんです。けれど、それよりも大きなポイントは、ファンである自分が「なにをするか」にあります。

私の同僚たちのように、好きな対象のイメージをもとになにかを^d生成してしまう、好きな対象と同じことをしてしまう、好きな対象の世界を現実で^eタイカンしようとしてしまう、など「推し」をめぐつてファンはいろいろなことをしています。その対象をただ受け身的に愛好するだけでは飽^あき足らず、能動的になにか行動してしまう対象が「推し」である、と本書では考えます。

対象をただ受け身的に愛好するだけの段階から、好きという情熱に突^つき動かされ、なにかしたい！ という気持ちになったら、まずはなにをするでしょう。

応援する、ほかの人にすすめる、グッズを集めるなどは、^⑤「推し」を推す、はじめの一步です。自分が好きなものが活^{かつ}躍^{やく}している姿を見て、「すてき！ 頑張れ！」と言いたい、自分が好きなものをもっと多くの人に知ってもらいたい、自分が好きなものをもっといろいろ見たい、そんな気持ちが、好きな対象をただ享^{きよう}受^{じゆ}するだけの立場から、^⑥自分が対象に「なにかをする」行動へと駆^かり立てます。

テレビや雑誌やインターネットで見るだけだったアイドルやアーティストのライブへ行つて声援を送ること、見る・読むだけだったアニメやマンガの感想をSNSに書いてみることに、ポスターやいろいろなグッズなどを集めたり部屋に飾^{かざ}ってみることに……ファンとして「なにかをする」ことは、その人を受動的なファンから能動的なファンへと変化させます。

自分から対象に働きかけることによって、自分は変化するのでしょうか。つまり、受動的なファンから能動的なファンへと行動が変化した時、ファンである自分のところは、なにか違うものになっているのか、ということです。

それは逆でしょうって？ ところが変化したから行動が変化したのであって、だとしたらこ

ころが違うのはあたりまえなのではないか、そう思うのはたしかに当然です。

認知科学^{※2}や心理学では、身体性認知 (embodied cognition) という考え方があります。それは、人間の認知活動を^{※2}こころと身体^{からだ}と環境とのダイナミックなやりとりとしてとらえます。身体はこころの単なる入れ物ではなく、環境や状況^{じょうきょう}は必要とする情報源や行動するだけの場所ではなく、感情は認知を妨害^{ぼうがい}するものではないのです。身体や環境や感情は、人間の認知活動とわかちがたく結びついていると考えます。^⑦身体性認知は、こころから行動を考えるだけでなく、身体^{こゝろ}の行為から認知をとらえなおそうというアプローチでもあるのです。

(久保 (川合) 南海子 『推し』の科学)

※1 享受…受け入れて味わうこと。

※2 認知科学…人間の心の動きや、人間が学ぶ仕組みを研究する学問。

※3 ダイナミック…状況に応じて変化するやわらかさがあること。

問一 部 a～e のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 部 ①、②の意味としてもっともふさわしいものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①	ジャンル	ア	特徴	イ	性格	ウ	行動	エ	種類
②	モチーフ	ア	改変	イ	題材	ウ	理想	エ	整理

問三 —— 部 ①「推し」とありますが、この言葉はそもそものどのような意味で使われているか。その説明が書かれている一文を探し、最初の五字を答えなさい。

問四 ―― 部②「そういわれるとちょっと違うんだよね……」とありますが、何が「違う」のですか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア「ファン」と「推し」を、同じ意味の言葉として使うこと。

イ自分だけが「推し」を熱心に応援していると思ひ込むこと。

ウ「推し」という言葉を女性アイドル以外に向けて使うこと。

エ世界のすべてが、だれかの「推し」になるかも知れないこと。

問五 ―― 部③「でも私はなぜか、羽生選手を彼女の『推し』だと思ったことはなかったのです」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア「同僚」が「私」に羽生選手の話をするのは、スケートの大会期間だけだったから。

イ「私」には他に「推し」があつて、「同僚」の「推し」の話には興味がなかったから。

ウ「同僚」の羽生選手に対する熱心さを、「私」が信用しないで心の底では疑つていたから。

エ「私」は「同僚」が羽生選手に対して、自分から行動を起こしていると知らなかったから。

問六 ―― 部④「ただのファンではなく、『推し』を推すファン」とありますが、「ただのファン」と『推し』を推すファン」の違いは何ですか。本文中の言葉を使って五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問七 ―― 部⑤「『推し』を推す、はじめの一步」とありますが、「はじめの一步」の例としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

アあこがれているキャラと同じコスチュームを着る。

イ流行している話題のテレビドラマを録画しておく。

ウ応援しているスポーツチームの応援歌を覚えて歌う。

エ気に入っているお菓子の工場見学に行き取材する。

問八 ―― 部⑥「自分が対象に『なにかをする』行動へと駆り立てます」とありますが、ファンの気持ちを「駆り立て」ている源みなもととなっているものをこれより前の段落から七字で抜き出して答えなさい。

問九 次の会話文は、―― 部⑦「身体性認知は、ここから行動を考えるだけでなく、身体の行為から認知をとらえなおそうというアプローチでもある」について話し合っている場面です。本文の内容にあ、わ、な、い、も、の、を、次、の、A、さ、ん、D、さ、ん、の、中、か、ら、一、人、選、び、ア、ル、フ、ア、ベ、ッ、ト、を、答、え、な、さ、い、。

Aさん 「『身体性認知』って、つまり、やる気になったから机に向かって勉強するんじゃない、机に向かって教科書を開いたらやる気が出てきた、みたいなことだよ
ね。」

Bさん 「僕は今まで料理に興味がなかったけど、何となく親を手伝っていたんだ。そうしたら料理が面白くなってきて、今は自分で料理のレシピを考えることが趣味になったよ。」

Cさん 「私はバスケットが好きで、この前のワールドカップを生で観戦して来たんだけど、どの選手もレベルが高くて感動しちゃった！ 今、その時の選手のプレーを実際に真似して練習してるんだ。」

Dさん 「俺おれは昨日、姉に誘われてバンドのライブに行ったんだ。そのバンドの曲は一つも知らなかったのに、観客と一緒に飛び跳ねているうちに楽しくなって、そのバンドが好きになっちゃったんだ。」

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 朝の教室は、子どもたちが持ってきた自由研究や自由工作でいっぱいだ。大きな模造紙に旅行記を書いてきた子や、手作りの椅子いすを持ってきた子もいる。前田香奈枝かなえは布の手提げバッグを作っていたし、斜め後ろの増井智帆ちほは粘土ねんどで作ったお菓子かしバスケット、松丸颯介さうすけは富士登山の体験記だ。

陽太は自分のくす玉を取り出して、紐ひもで持って、ぶらぶらと振り子のように振ってみた。

② なんでそんなことをしたのだろう。

おまけに陽太はつぶやいている。

「これ、作るの、大変だったなー。けっこう、時間かかったなー」

しばらく誰だれからも声がかからなかったから、陽太はもう一度、今度は少し声を大きくした。

「おれの、自由工作、けっこう、時間がかかったなー」

すると、ようやく「なに、それ」と、隣の席の前田香奈枝が話しかけてくれた。

誰かに話しかけられるのを待っていたくせに、陽太は黙だまる。

「へー、すごいじゃん、武市。紙でボール作ったんだ」

陽太の手の中から、ひょいとくす玉ぬすたまが抜かれていて、それはすでに、前田の手の中にあつた。

「かわいいー」

と言いながら、前田がぼんぼんと、くす玉を弾はすませる。

陽太は焦あせった。

前田がぼんつとくす玉を放った。前田の友達の飯田麻耶まやが受け止める。

「投げて、投げて」

前田が面白がるように言い、飯田は戸惑とまじっている。

「だめ、それ」

陽太は言った。

その声は、たしかに前田に聞こえたはずだけれど、前田は陽太のほうを見なかった。

「まやまや！ こっち！」

パスを促す^{うなが}ように、飯田に向かって手をあげる。

飯田が前田の声に押^おされたように、ふっと手首を持ち上げた。

「だめだ！」

陽太は大きな声を出した。

「だめだ！　だめだ！　だめだ！」

陽太は叫^{さけ}びながら飯田に突進^{とっしん}した。

だめだ！　だめだ！　だめだ！　だめだ！　だめだ！　だめだ！

③ 背中に誰かの体温を感じ、陽太は我に返った。

机^{たお}が倒れていた。飯田が泣いていた。先生が、陽太の背に手を添^そえている。教室がしんと静まり、皆^{みな}が陽太を見ていた。

いつの間にかくす玉は陽太の手の中にあっただけど、それはすでに前とはかたち^{ちが}が違った。部品の片側がへにやりと凹^{へこ}んでしまっている。陽太はそのことに気づいて、体が熱く震えだしそうになるのを必死にこらえる。みんなに見られている。みんなの目が体じゅうに突き刺^ささる。

「武市さん！　飯田さんに謝^{あやま}りなさい！」

藤岡先生^{ふじおか}が、陽太に言った。

「なんだよ、なんだよ」

「武市がまたキレた」

「あいつ、頭おかしいから」

ひそひそ声。陽太は、ごめんなさい、がどうしても出ない。どうしても、言いたくない。

その時、誰かが言った。

「先生、武市くんの言い分も聞いてあげませんか」

陽太を囲む子どもたちの、その奥^{おく}のほうから聞こえたのは、おとなの声だった。

顔を上げた陽太は、その人を見て、自分の心がほろほろと崩^{くず}れそうになるのを感じた。

麦わらさんだった。今日は麦わら帽子^{ぼうし}をかぶってはいないけど、よく着ている縞^{しま}々の服が同

じだし、顔も同じだから、陽太にはその人が麦わらさんだと分かった。④ このクラスの誰かの

お母さんだったのだ。

⑤ 陽太と目が合うと、麦わらはさんは小さく頷いた。そして、まるで自分が陽太のお母さんであるかのような、責任感に満ちた目で、

「ふたりともに、言い分があるんじゃないかと……」

と、ラジオ体操で陽太を褒めてくれた時と同じ、優しい声で言ってくれた。

おとなに言われたら、先生もさすがに無視はできないと見え、

「そうですけど……じゃあ、武市さん。いったい、どうして。何があったのか、説明して下さい」

と陽太に訊いてくれたのだけど、「あれ」がくるから、陽太はやっぱり、すぐには答えられない。麦わらさんの信頼にこたえたいのに、くちびるが震えて、息をちゃんと出せない。そんな自分がふがないし、喋れないどころか、くしゃつとなったくす玉が目に入るたびに、涙が出そうになってしまう。⑥ 陽太はぐつとくちびるの裏を噛んだ。男が泣くのは恥ずかしいこと。

それは、何度も何度も、何度も言われてきたことだ。陽太が泣くたび父さんは、おまえの育て方が悪かった、と母さんを怒鳴った。

「じゃあ武市くん、怒ってしまった理由を、おばさんに教えて」

麦わらさんが陽太の前まで進み出てきて、目を見て問うた。

陽太は、ひゅうつと喉が鳴るような音をたてて息を吸ってから、教室のみんなに言うのではなく、麦わらさんだけに、説明をする。

「糸が、取れると、だから、これは常識なんだけど、かたむすびしたけど、糸は弱いから、取れると、ぜんぶだめになるって、分かりきってるのに。それなのに……」

ばらばらになった言葉を必死でかき集め、どうにかつなぎ合わせてゆく。

「でもね、武市さん」陽太をさえぎり、先生が言った。「事情はあるのかもしれないけど、どんな場合でも、手を出しちゃだめでしょう」

「でも……」

「でも、じゃないの！ 困ったことや、厭なことがあったら、口で言いなさいって、いつも言っているでしょう！」

⑦ 先生が急に大きな声を出した。

その声は、陽太にだけ言っているのではなく、麦わらさんや、他の子たちにも聞かせようとするかのように、大きな声だった。

でも……。

陽太は言葉をのみこんで、うつむいた。絶対にだめだ、泣いたらだめだと思っているのに、止められなくて、涙があふれて、上履^{うわば}きへ、ぽたんと落ちた。

「先生」

陽太と飯田を囲む輪の、外側からか細い声がしたのは、その時だった。

尾辻^{おつじふみ}文也^やだった。

「なんですか？ 尾辻さん」

「先生……おれ……」苦しうに、文也が言う。「おれ、見てたけど、飯田さんじゃなくて、誰かが、飯田さんに、武市のくす玉を投げるように言ってた」

「誰かが？」

先生の眉^{まゆ}が持ち上がる。

⑧ 文也の目が苦しうに、ちらつと前田をとらえるのを、陽太は見だし、他のみんなも見ていた。先生は飯田に事情を訊くが、飯田は答えず、うつむいたまま、肩^{かた}を震^{ふる}わせて泣き続ける。周りの子たちが、ちらちらと、前田を見ていることに、先生はもう気づいているはずだ。

「では、いったん終わりにして。飯田さんと武市さんは、二十分休みに先生と話します。はい、じゃあ、みんな席^{もど}に戻って」

先生が言った。

その時、

「香奈枝！」

麦わらさんが急に大きな声で、前田の名前を呼んだ。

「香奈枝。あなたが飯田さんに、武市くんのくす玉を投げるように言ったの？」

「は？ 言っていないし」

前田が嘘^{うそ}をついたので、

「言った！」

とつさに、陽太は叫んでいた。

「言った！ 言った！ 言った！」

麦わらさんに分かってもらいたくて正直に言ったのに、麦わらさんの目に浮^うかんだのは、深い悲しみだった。自分の味方をしてくれた麦わらさんが、^⑨ どうして、こんなに傷ついた顔をするのか、陽太には分からなかった。

（朝比奈あすか 『君たちは今が世界^{すべて}』）

問一 —— 部①「朝の教室は、子どもたちが持ってきた自由研究や自由工作でいっぱいだとありますが、これは何月のことだと考えられますか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 四月 イ 七月 ウ 九月 エ 一月

問二 —— 部②「なんでそんなことをしたのだろう」とありますが、なぜだと考えられますか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の声が成長したところをみんなに聞かせたいと思ったから。

イ 自分の自由工作の出来をだれかに見てもらいたかったから。

ウ 自分の自由工作を他の人の自由研究と比べてみたかったから。

エ くす玉を割ったら皆がどういう反応をするか気になったから。

問三 —— 部③「背中に誰かの体温を感じ、陽太は我に返った」とありますが、どんなことが起こったと考えられますか。それを説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、それぞれ（ ）内の字数に従って答えなさい。ただし、

I

く

Ⅲ

 は本文中から抜き出し、

Ⅳ

 にはあてはまる言葉を自分で考えて答えなさい。

「陽太」が

I (六字)

 を取り戻すために

Ⅱ (二字)

 し、

Ⅲ (四字以内)

 を

Ⅳ (六字以内)

 しまった。

問四 ―― 部④「このクラスの誰かのお母さんだった」とありますが、だれのお母さんだと考えられますか。本文中から抜き出して答えなさい。

問五 ―― 部⑤「陽太と目が合うと、麦わらはさんは小さく頷いた」とありますが、このときの「麦わらはさん」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のことを信頼してくれている「陽太」に成長してほしいという気持ち。
- イ 自分の子どものように育ててきた「陽太」を見守りたいと思う気持ち。
- ウ ここで「陽太」のことを手助けできるのは自分しかないと思う気持ち。
- エ 「陽太」の味方になることで周囲から嫌われる覚悟を決めた気持ち。

問六 ―― 部⑥「陽太はぐっとくちびるの裏を噛んだ」とありますが、なぜですか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア くちびるを噛んでいるのを父親に知られると、また母親が怒鳴られると思ったから。
- イ 自分のことをばかにした生徒を見返したかったが、それができずくやしかったから。
- ウ 自分の怒りを落ち着けるため、父親から教わったやり方を実行してみたから。
- エ 自分の思った通りにできず、涙がこぼれそうになるのをがまんしているから。

問七 ―― 部⑦「先生が急に大きな声を出した」とありますが、誰に、どのようなことを伝えようとしたと考えられますか。本文中の言葉を使って五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 ―― 部⑧「文也の目が苦しそうに、ちらっと前田をとらえる」とありますが、この時の「文也」の気持ちとしてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「陽太」の行動の原因を作った「前田」のことを言えば、自分の立場が悪くなるかもしれないと心配する気持ち。

イ 自分が正しいことをして信頼を回復するチャンスを探していたが、いざとなると勇気が出ず迷う気持ち。

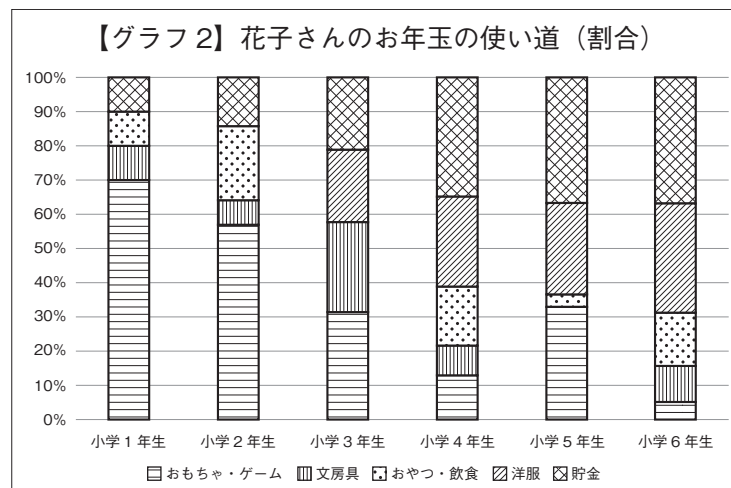
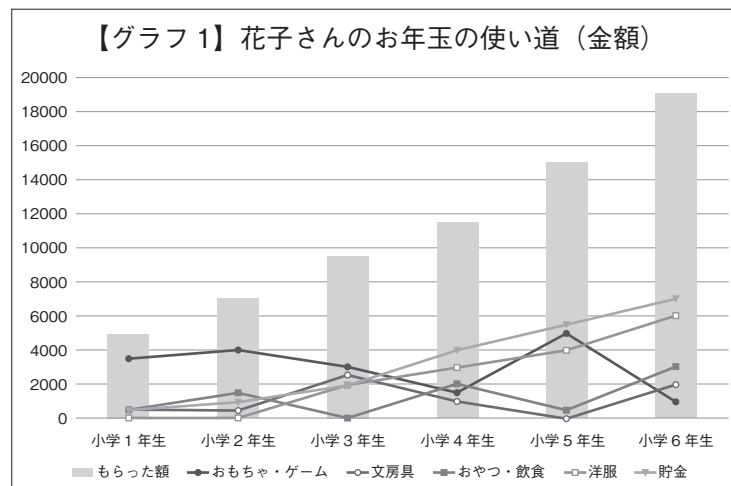
ウ いつも自分が「陽太」にしていることをつぐなうために正しいことをして、「陽太」に許してもらいたいと思う気持ち。

エ 自分が「先生」から信用されていないことを知っているため、受け入れてもらえないかもしれないとおびえる気持ち。

問九 ―― 部⑨「どうして、こんなに傷ついた顔をするのか」とありますが、理由としてどのようなことが考えられますか。本文中の言葉を使って五十字以上六十字以内で説明しなさい。

三

花子さんは小学1年生から小学6年生まで毎年もらっていたお年玉の使い道についての記録を振り返ったところ、【グラフ1】・【グラフ2】のようになりました。このグラフを元に後の問いに答えなさい。



問一 花子さんのお年玉について述べた次の文章の空らん A 〽 D に入る言葉を答えなさい。

なさい。

お年玉の使い道としては、 A にあてる金額も割合も毎年増えている。 A を除いて

見てみると、一・二年生のころは B に使う金額が一番多かったが、三年生以降は

C に使う金額が多くなり、その割合も年々少しずつ高くなっている。 B に使う

金額が一番多かったのは D 年生の時である。

問二 次の①～⑤の文が【グラフ1】・【グラフ2】から読み取れる内容として正しければ○、

間違っていれば×と答えなさい。ただし、すべて同じ記号を解答することは認めない。

- ① 花子さんは毎年お年玉で文房具を買っている。
- ② 毎年お年玉をおやつ・飲食に使っているが、その額は年によって違う。
- ③ 花子さんは毎年貯金する額が増えている。
- ④ 二年生以降毎年貯金しているので、花子さんの貯金は毎年増えている。
- ⑤ 花子さんがもらうお年玉は毎年増えている。